

川崎市

精神障害にも対応した
地域包括ケアシステムの構築に向けて
～ 構築支援事業に参加して ～

川崎市都道府県等密着アドバイザー

医療法人新光会 生田病院 加藤 昌代

井田地域生活支援センターはるかぜ 棚次 真理子

(共同作成者) 川崎市精神保健福祉センター 上野康夫 (都道府県等密着アドバイザー)
川崎市健康福祉局障害保健福祉部精神保健課 山田 敦 (自治体担当者)

1 はじめに

(自治体担当者より)

- 平成28年度に地域移行・地域定着支援の体制変更をしたばかり。そんななかで、課題は何となく認識していました。
- 行政中心だった取り組みから、ひとりでも多くの長期入院者の地域移行をしていくために、もっと支援のすそ野を広げて地域の中で担い手を増やしたい。
 - でも、精神障害の支援経験のある事業所に偏りがち。
- 630調査から、同程度の病床数でも入退院患者数等について、病院ごとのばらつきが大きく、長期入院者の地域移行を進めることができれば、市内の精神病床をもっと有効に活用できるかも。
 - でも、個別に病院へ働きかけをしていくための、きっかけがない。
- そんななかで、構築支援事業を活用できないかと、「密着アドバイザーになりませんか」と、自治体担当者から声をかけたところが始まりです。
- 今日は、そんな密着アドバイザーが、実践で感じていることなどを中心にお話しいたします。
- なお、取組の具体的な内容や経過は、AD合同会議「事前課題」やスライド最後の概要図を、後からゆっくりご参照ください。

2

支援事業に参画した、きっかけや経緯

医療機関

- 事業として取り組むことの意味が良く解らないがやっていた事の続き・・・という安易な発想
- 勤め先の病院に長期入院者が多いという認識があった

支援機関

- 「井田地域生活支援センターはるかぜ」は、平成28年度より川崎市の指定管理者として、川崎市と協働して地域移行支援に取り組んでいます。
- その流れで、自然に私に白羽の矢が…（光栄です）

3 参画したことで、良かったこと、取り組んだこと

医療機関

- 今迄も実施していたはずの地域移行を見直す機会になった
- 「実行に移さなければ意味がない」という意識の高まり
- 病院内に事業周知するためのコーディネーター
事業対象者の選定
現在、院内外プログラム実施に向け調整中

支援機関

- モデル事業を実施するにあたり、病院や相談支援センター連絡会、区の自立支援協議会などで事業説明を繰り返し行いました。
- その結果…顔が売れた？
- モデル事業だけでなく、はるかぜで取り組んでいる地域移行がやりやすくなりました。

4

参画したことで、見えてきた課題

医療機関

- 地域に協力してもらおうという視点になりがち
→ 一緒に取り組む意識の欠如
- 院内の地域移行推進に対する意識を全体的に高めることは難しい

支援機関

- モデル事業に取り組む相談支援センターの「支援の入口」の不安軽減を重視していましたが、実は「支援の出口（住居設定や定着支援）」がボンヤリしていることも不安を感じさせてしまう要因のようです。
- 入口から出口まで連続した支援体制を整えることが、今後の課題のひとつだと感じています。

5 今後の予定

○平成30年度も引き続き構築支援事業を活用して、モデル地区での取組を継続（したいです）

- ①コーディネーター（密着アドバイザー）バックアップによる、入院患者への個別支援を継続（現在3名を支援中）
- ②精神科病院において「地域移行に向けた退院プログラム」を関係機関及びピアサポーター等と共同で実施
- ③研修会の開催（事業実施で得られた課題、今後の方向性の共有）
- ④北部地区ネットワーク及び全市に向けた実施状況の情報発信

○今後の南部・中部地区での展開に向けた戦略の検討

6 さいごに

川崎市の精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの構築に向けては、
**「誰もが住み慣れた地域や自らが望む場で安心して暮らし続けられる
川崎市を目指して」**

という、市の方針と同調して、

「支援のすそ野を拡げることを目指して」

地域自立支援協議会の部会やワーキンググループと連携し、

「精神科病院と地域関係機関との信頼関係・顔の見える関係づくり」

という、構築支援事業のモデル地区における取組を、

何度も遠くから足を運んでくれている広域アドバイザー（感謝）

とともに、長期入院者の地域移行を着実に実施しながら、

「今後の市内各地域での展開に向けて」

ピアサポーター・医療・福祉・行政が知恵と力を合わせて、
取組を進めていきたいと思っております

精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの構築に向けた取組 北部モデル圏域における地域連携支援事業

